



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	反復可能な芸術作品の存在論とまばらなメレオロジー唯名論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	西條, 玲奈
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11589号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57733
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Reina_Saijo_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 西 條 玲 奈

学位論文題名

反復可能な芸術作品の存在論とまばらなメレオロジー唯名論

本論文の主題は、演劇、音楽、文学、写真などの、同一の作品が繰り返し上演され、演奏され、何部も印刷され、何枚もプリントされうる、反復可能な芸術作品の存在論である。このように同一の作品が複数の出現をもちうるジャンルについては、作品と個々の出現との関係を、普遍者とその事例との関係や、記号論におけるタイプとトークンの関係として理解しようとする見方が根強い。本論文で西條氏は、このような見方を「芸術作品の普遍者説」という名のもとに一括して批判し、対案として「まばらなメレオロジー唯名論」を提案し擁護している。

「まばらなメレオロジー唯名論」とは、「まばらなメレオロジー融合体に基づく唯名論」の略称である。メレオロジーは、ポーランドの論理学者レシニェフスキーが創始した、事物とその部分の関係を扱う理論である。この理論においては、任意の事物の集まりについて、それらの事物を部分として含む融合体を定義することができる。本論文の目的は、芸術作品をその出現のメレオロジー融合体とみなすことにより、普遍者やタイプのような抽象的対象を要請せず、具体物だけを指定する唯名論的存在論の中に芸術作品を適切に位置づけることである。

また「まばらな」融合体とは、アメリカの哲学者ルイスが集合論に基づく性質の理論において、任意の雑多な事物を寄せ集めた集合を「性質」と認めた際に、普遍者に対応する特別な性質を「まばらな性質」として区別した着想を、西條氏がメレオロジーに翻案したものである。メレオロジーにおいては、任意の事物の寄せ集めを融合体とみなせるため、融合体はいくらでもあるのに対して、芸術作品に相当するメレオロジー融合体は稀にしか存在しないという意味で「まばら」なのである。

芸術作品に相当するまばらなメレオロジー融合体の部分となるのは作品の出現だが、西條氏は、オーストリアの哲学者ウィトゲンシュタインの肖像画論とイギリスの哲学者エヴァンスの固有名論を参考に、個々の出現が特定の作品の出現であるためには、その出現の制作者が当該の作品を上演／演奏／出版／焼き付け等することを意図していること（制作意図の条件）と、その出現が当該作品の源泉（究極的には脚本の執筆行為、作曲行為、原稿の執筆行為、写真の撮影、現像、焼き付け行為等）に因果的に由来すること（因果的源泉の条件）が必要であるとみなしている。芸術作品を、この2条件により規定されるまば

らな融合体とみなすならば、普遍者を要請せずに、芸術作品がもつとされるさまざまな特徴を存在論の中に無理なく位置づけることができるというのが、西條氏の主張である。

本論文第1章では、まず普遍者説の論拠とされてきた芸術作品の特徴が確認される。すなわち、(1)同じ作品の出現の間に質的類似性があること、(2)同じ作品の出現が類似した因果的効力をもつこと、(3)作品の出現の存在は作品の存在に依存するが、作品は個々の出現には依存しないこと、(4)上演されない脚本等の、出現をもたない作品が存在しうることの4つである。普遍者説によれば、このうち(1)と(2)は、同じ普遍者を例化することによる類似として理解でき、(3)と(4)は、普遍者の個物からの独立性として理解できるとされる。

他方本論文で普遍者説の難点とされるのは、作品帰属の曖昧さの問題である。一般に普遍者は、個物とその事例となるための必要十分条件を決定するとみなされる。ところが芸術作品の場合には、些細なセリフの間違いやミスタッチにより、失敗と言われる上演や演奏も、上演ないし演奏しようとした作品の上演や演奏であることを否定されないし、例えば設定を20世紀の共産圏にうつしたゲールド監督のテレビ番組版『マクベス』も、日本の安土桃山時代に移し、セリフも日本語に翻訳した蜷川の『NINAGAWA マクベス』も『マクベス』の出現とみなされる。どのような特徴を持つ出現が、ある作品の出現とみなされるかは曖昧なのである。第1章の後半では、この問題に対する普遍者説からの対応の試みが、この問題に対処できないか、対処する際に普遍者説の利点を保持できなくなることが指摘されている。

第2章では普遍者を措定する理論一般の難点が二つ取り上げられる。一つ目は、プラトンが対話篇の登場人物にアイデア論について語らせた議論が導く無限後退の問題である。本章では、無限後退を避けようとする、普遍者を例化することが何故個物の間での性質の共有の説明になるのかが不明になる点を確認されている。二つ目は理論的複雑さの問題であり、これには存在論的複雑さの問題と認識論的複雑さの問題がある。認識論的複雑さの問題とは、具体物に関しては知覚による知識の成立を考えられるが、時空的位置をもたない抽象的普遍者を導入すると、その認識可能性の説明が別途必要になるという問題である。存在論的複雑さの問題は、必要がない限り存在者の種類を増やすべきではないという存在論的儉約の原理に関わる問題だが、本章では、これが普遍者説の難点となるのは、唯名論が芸術作品の特徴を普遍者説と同程度に適切に捉えられる場合に限ることが確認されている。

第3章では以上を踏まえて、既存の唯名論が評価され、普遍者説にとって説明しやすいとされた上述の(1)と(2)の特徴を捉えることが、既存の唯名論には困難であることが確認されている。そこで西條氏は、既存の唯名論のうち、理論的に単純なメレオロジー融合体説を改良することを提案するのである。

第4章ではまばらなメレオロジー唯名論が定式化される。その大枠は既存のメレオロジー融合体説と同じだが、上演、演奏等の出現が、ある作品の出現であるための必要条件として、上述の制作意図の条件と因果的源泉の条件を明示している点に独自性がある。これ

により、同じ作品の出現の間の質的類似（先の特徴(1)）と、因果的効力の類似（特徴(2)）は、この二条件を満たすことの結果として捉えられるようになる。またこの立場では、失敗した上演が、それでも上演しようとした作品の上演と認められるのも、グールドの『マクベス』や蜷川の『NINAGAWA マクベス』が『マクベス』の出現と認められるのも、普遍者を例化しているからではなく、上の二条件を満たすことによると理解できるようになる。

さらに本章では、融合体説によれば作品の存在が出現の存在に依存し（先の特徴(3)の否定）、上演されない作品の存在が理解できなくなる（特徴(4)の否定）という批判が取り上げられ、これらの点が「作品」概念の多義性により無理なく理解可能になることが示される。これは「作品」の存在が、脚本や譜面の成立により理解される場合と、上演や演奏などの出現の存在として理解される場合があるという多義性である。前者の意味での「作品」の存在は出現に先行し、出現に依存しない。しかし脚本や譜面が失われ、記録も記憶も失われ、出現もその可能性も消滅したならば、もはや作品は失われたとみなさざるを得ない。この意味で、融合体説においては、作品は消滅しうるものであることになるが、これはそれほど不自然ではないというのが西條氏の主張である。

残る第5章では、融合体説に対する4つの批判を取り上げ、それらに反論することにより、全編が締めくくられている。